

MESC 倶楽部(塾)

生活困窮世帯への学習支援

2016 年 3 月

特定非営利活動法人 みやざき教育支援協議会

はじめに

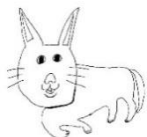
経済格差、地方格差が教育格差につながることは、様々なデータで明らかにされています。

宮崎県は全国的にも低賃金、長時間労働で、しかも非正規雇用が多く、離婚率さらには母子家庭の多さでも高い数値になっています。さまざまな要因がありますが、生活保護世帯や生活困窮世帯が増え、負の連鎖から「子どもの学習支援」は待ったなしの状況です。

2015年度、独立行政法人福祉医療機構の社会福祉振興助成を受けて「生活困窮世帯への学習支援事業」を行いました。特定非営利活動法人宮崎県ボランティア協会、一般社団法人みやざき公共協働研究会、有限会社サン・グロウ、学遊館つねひさの4者と連携し、「MESC 倶楽部（塾）」として週1回（3時間）、eラーニングを中心に、数学検定試験対策「ユニバーサル数学」やMOSマイクロソフト資格認定、さらに中途退学者の高等学校卒業認定試験対策などの学習支援を行いました。

活動のなかでさまざまな壁にぶつかりましたが、ここで培われたノウハウやつながりは今後に活かせるものと考えております。「弱さを見せられない、助けてと言えない」社会のなかで、子ども・若者に呼びかけながら、暮らしやすい地域作りに貢献できたらと考えております。

特定非営利活動法人みやざき教育支援協議会
代表理事 亀澤 克憲



目次

1. 貧困の実態	2
2. Eラーニングによる学習支援	7
3. 学習者・支援者・保護者の声	8
4. 自然体験・交流イベント	10
5. 井戸端会議	12
6. 学習支援をふりかえって	16
7. 運営委員の感想	20

表紙、カット……Emirin

1. 貧困の実態

■子どもの6人に1人が貧困状態

平成26年7月に発表された「平成25年国民生活基礎調査」によると、18歳未満の子どもの貧困率は16.3%と過去最悪を更新しました。

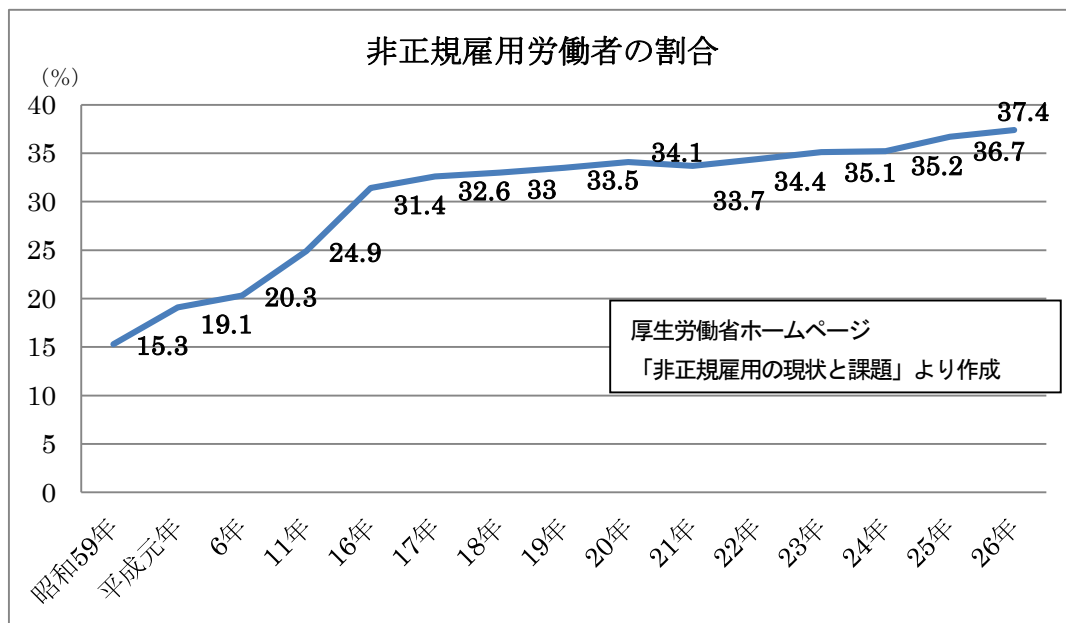
	昭和 60年	63	平成 3年	6	9	12	15	18	21	24
子どもの貧困率	10.9	12.9	12.8	12.1	13.4	14.5	13.7	14.2	15.7	16.3

平成25年 国民生活基礎調査の概況より抜粋

貧困率とは、その国や地域の大多数の人と比べて、相対的に貧乏な人の割合を出したもので、ここ2、30年の間に、所得格差が徐々に広がってきていることがわかります。かつては、一億総中流と言われた日本の社会も、「子どもの約6人に一人が、相対的に貧乏な状態にある」と言えるような状況となっています。

■非正規雇用労働者は全体の約4割。

雇用が不安定なほど貧困率が高い。



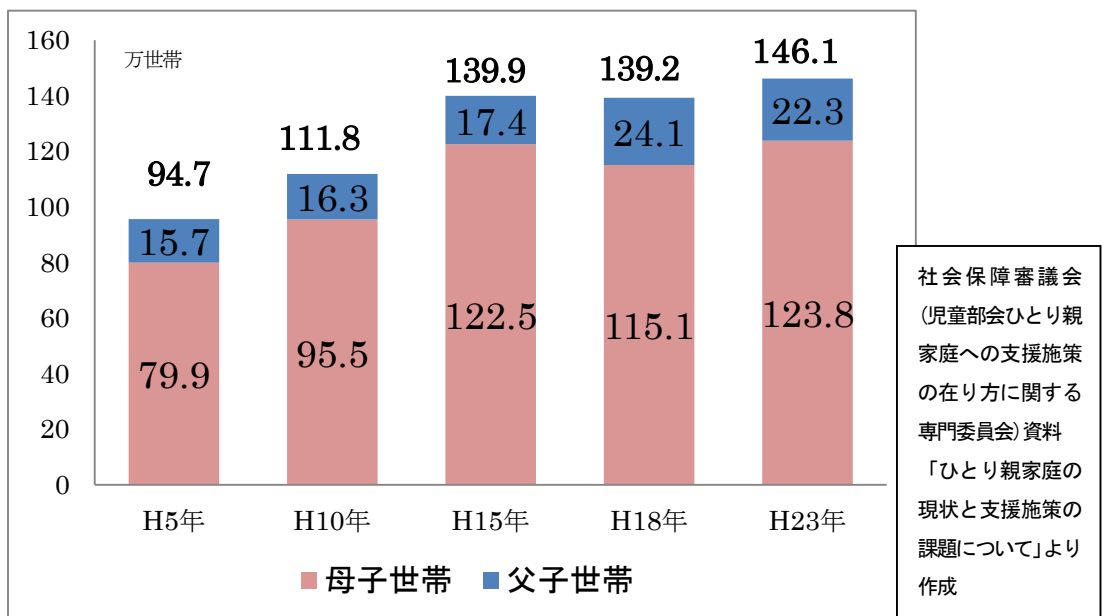
「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ」によると、父親の就労形態別に子どもの貧困率を比較しており、非正規の被雇用者の父親を持つ子どもの貧困率は3割を超え、また、契約期間が短く雇用が不安定なほど、貧困率が高いことがわかります。

父親の就労形態	子どもの貧困率
正規	6.7%
非正規	33.4%
雇用期間の定め無し	
雇用期間の定め無し	7.0%
雇用期間の定め有り（1年以上）	11.8%
雇用期間の定め有り（1月以上1年未満）	20.9%

「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ」より作成

■ひとり親家庭の増加。

その半数以上が相対的に貧困な状態。



平成 23 年の母子世帯数は約 124 万世帯、父子世帯は約 22 万世帯で、合わせて、約 146 万世帯となっています。宮崎県の世帯数が約 47 万世帯なので、全国で、宮崎県 3 つ分位がひとり親世帯になる計算です。

国民生活基礎調査によると、「子どもがいる現役世帯」（世帯主が18歳以上65歳未満で子どもがいる世帯）の貧困率は、15.1%となっており、そのうち「大人が一人」の世帯では54.6%となっています。「大人が一人」の「子どもがいる現役世帯」の半数以上は、「**相対的に貧困な状態にある**」という状況となっています。

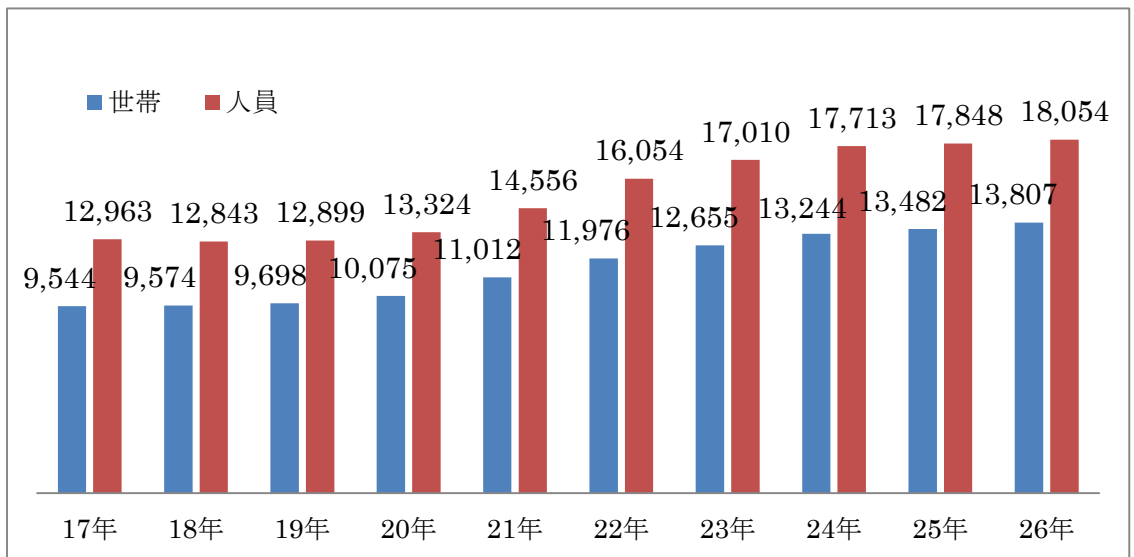
	貧困率
子どもがいる現役世帯	15.1%
大人が一人	54.6%
大人が二人以上	12.4%

平成25年 国民生活基礎調査より

特に母子世帯では、1世帯当たりの平均所得金額が、243.4万円（全世帯では537.2万円。児童のいる世帯は673.2万円。）と全世帯の半分程度で、全世帯の平均所得金額（537.2万円）以下の割合は、95.9%にもなっています。

■宮崎県の状況（宮崎のこども対策特別委員会資料より）

・宮崎県の生活保護状況の推移



平成20年9月のリーマンショックの影響により、保護世帯数、人員ともに急増。その後も緩やかな増加が継続しています。

・ 18 歳未満の生活保護受給者

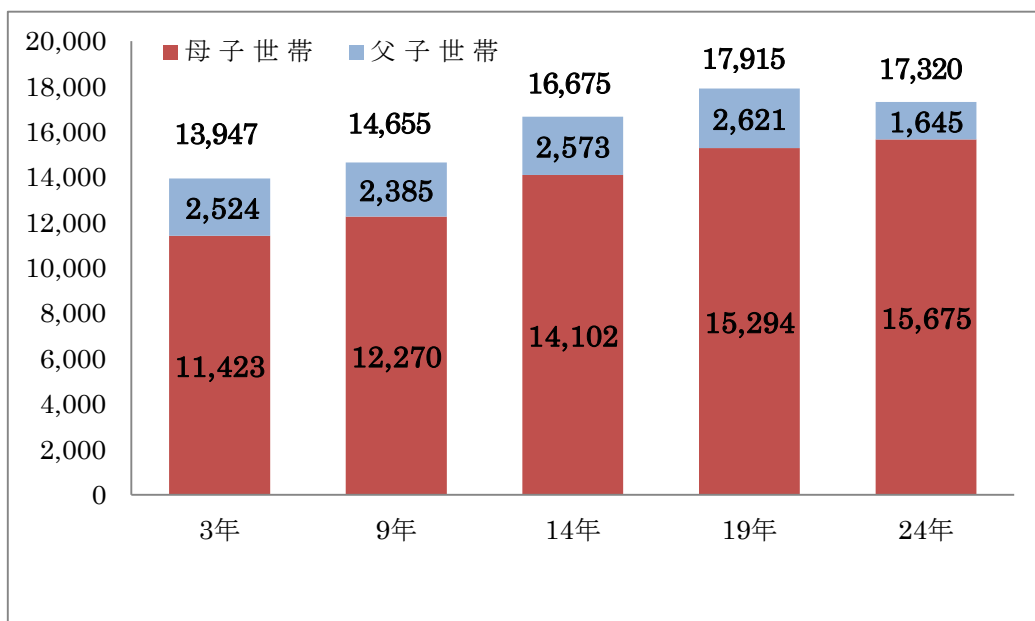
	20 年	21 年	22 年	23 年	24 年	25 年	26 年
18 歳未満の生活保護受給者数(人)	1,440	1,516	1,897	2,064	2,121	2,026	1,995

生活保護受給者のうちの 18 歳未満の人数は、平成 20 年に比べ、約 1.4 倍となっています。

生活保護世帯の子どもの高等学校進学率 89.4% (平成 25 年)

【宮崎県全体の進学率 98.4%】

・ 宮崎県のひとり親世帯数の推移



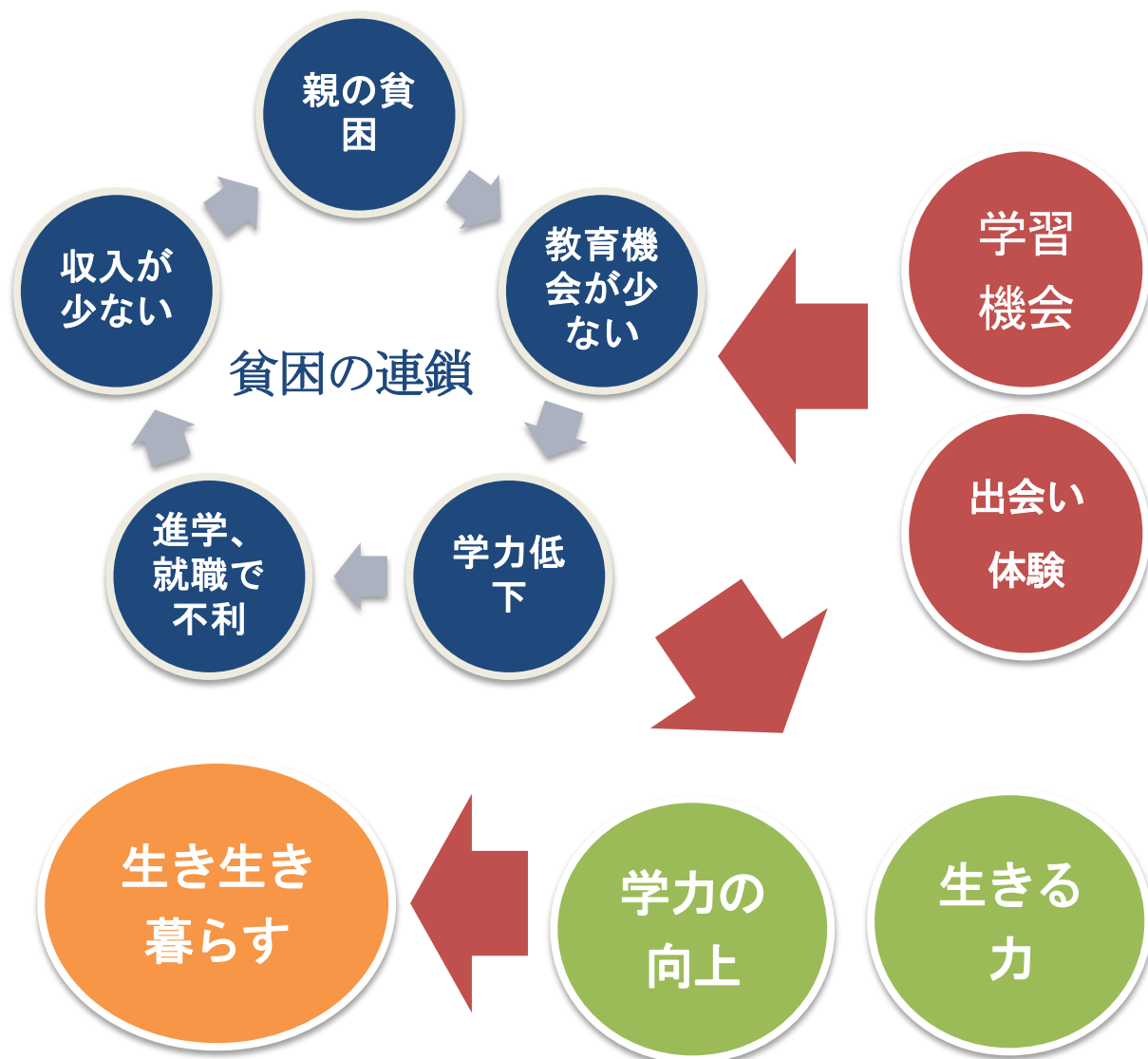
母子世帯の世帯数は増加が続いています。生計の状況は、常用雇用の割合は、母子世帯は、父子世帯よりも少なく、収入も少ない状況があります。



■ 貧困の連鎖を断ち切るために・・・

「平成 23 年 10 月 4 日厚生労働省第 6 回社会保障審議会生活保護基準部会資料」によると、被保護世帯の貧困の世代間連鎖の調査結果では、被保護世帯の 4 分の 1 が生家での生活保護受給歴があり、母子世帯ではこの割合が約 4 割にもなり、被保護世帯のなかでも母子世帯の貧困の世代間連鎖の強さを指摘しています。

この「貧困の連鎖」を断ち切る必要が、今、求められています。



「人生のスタート時から格差が生まれている」と言われる格差社会のなかで、貧困の連鎖を断ち切る為に、子ども達に、学習の機会を提供することがまず必要です。また、学習の機会のみならず、様々な人や地域との出会いのなかで、自信や安心感を持ち、生きる力をつけていくことが、貧困の連鎖を断ち切り、生き生きと暮らしていくことに大いに役に立ちます。

2. Eラーニングによる学習支援

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

各種検定・資格取得をめざす中・高校生を支援

塾生募集

無料

ひとり親家庭、教育資金が困難な家庭、中途退学者、ひきこもり、軽度の発達障害などの中・高校生を支援します。
パソコンやタブレットを使ったeラーニングを中心に、自学自習の習慣化と各種検定・資格取得をめざします。

講座

1. eラーニング「ユニバーサル数学」を使った数学検定対策講座
2. 就職や進学で役立つMOSマイクロソフトオフィス認定試験対策講座
3. 大学進学をめざす高等学校卒業認定試験対策講座
4. その他、パソコンやスマホを使った自宅でのeラーニング講座



教室

	名称(連携団体)	住所	定員	開設日時(予定)	責任者
1	NPO法人 宮崎県ボランティア協会	宮崎市原町2-22 宮崎県福祉総合センター内	5名	毎週土曜日 13:30~16:30	永山倫太郎
2	一般社団法人 みやざき公共協働研究会	宮崎市橋通西5-6-57 山崎ビル4階	10名	毎週日曜日 13:30~16:30	黒岩 雄二
3	有限会社サングロウ 学遊館つねひさ	宮崎市大字恒久6919-14	5名	〃	濱門康三郎
4	入寮または自宅	宮崎市および近隣市町村	20名	随時	寮管理者 又は保護者

- 教室開設は、週1日3時間ですが、塾生の希望や教室の都合により変更する場合があります。
 - 講師は、元教師やIT技術者、大学生などが務めます。
 - 1~3教室ではパソコンやタブレットを貸し出します。
 - その他、実技実習講座があります。(自由参加、材料費負担)
- 農と食を楽しむ稲刈り宿泊体験、プロ指導による写真、陶芸、書などのワークショップ、防災訓練キャンプなど。

MESC倶楽部(塾)

つなぐ教育 共に創る教育

特定非営利活動法人みやざき教育支援協議会

Miyazaki Education Support Conference

お問い合わせ・申込先

〒880-0032 宮崎市霧島4丁目1-2 セントパーク206

Tel/fax 0985-41-4451 Email info@npomesc.jp

担当：川崎 郁夫(月~木曜日 10:00~16:00)

申し込み

電話/FAX、または電子メールでお申ください。随時、受け付けています。

氏名	学年 又は年齢	住所	電話 又はメール	希望講座 番号	希望教室 番号

上記は本事業の目的以外には使用いたしません。

3. 学習者・支援者・保護者の声

パソコン資格取得（通信制高校生）

10 か月ほど、MESC の方でパソコンの資格取得のため勉強させていただき、パソコンはもちろん、資料テキストなどのご準備までしていただき、とても助かりました。分からないところもすぐに聞け、必ず一人は先生がいらっしゃるので安心して、集中もでき、勉強することができました。

また、時間帯もこちらに合わせてもらったりと、本当に手取り足取りサポートしてくださり、パソコン資格取得も叶いました。今後、ここで学んだ知識を忘れずスキルアップできるように励みたいと思います。そして、それが生かせる職に就けるよう努力していきたいです。

学習意欲や成果を実感（事業所勤務）

MOS ワード認定試験対策講座で週 2 回、テキストを使い大学生の H さんとマンツーマンで勉強しました。H さんには 3 か月かけて何回もくり返し教えてもらいました。いざ試験問題をやってみると、回答する時間とテスト内容についていけなくて困惑してしまいました。別に、計算ドリルを使い算数の学習もしていたので、1 か月前からはイーボードという e ラーニング教材で苦手な割り算の計算問題も学んでいます。こうしたきっかけで学習意欲や成果を実感するようになり、向上心が特てるよになりました。また機会があればワードの勉強もしたいと思います。

自信がついた（中学生 3 年生）

勉強の習慣がついた。数学の基礎的なところができるようになった。数学に自信がついてきた。ここに来ることで勉強する時間が規則的になった。高校生になっても続けていきたい。お菓子を食べながら先生と雑談することも楽しかった。4 月からも来たいと思っている。

手ごたえを感じた（中学生 3 年生）

最初は、なかなか勝手がわからなかったが、慣れてくると結構やりやすかった。何度も繰り返すことで理解が深まった。友達と一緒になので、続いたのかもしれない。数学に手ごたえを感じている。ここに来ると静かに勉強ができた。もっと早く取りかかっていけばという思いもある。高校に入っても続けていきたいと思っている。




試行錯誤の連続（支援員Hさん）

私が学習支援員をしてみようと思ったのは、大学生でないと経験できないことだろうということ、様々な人たちと出会うきっかけにもなると思ったからです。

MOSという資格を取るための勉強をサポートしてもらいましたが、私も一緒に勉強しながら支援をしていくという感じでした。


支援員としての実力はまだまだなので、どうすれば上手く教えられるのか試行錯誤でした。でも、塾生の方と過ごす時間は楽しかったです。



避難所的な場所（支援員Iさん）

当初、eラーニングによる学習サポートを考えていたのですが、それだけでは対応が難しい面もありました。特に高校受験をひかえた中学生には過去問など受験に応じた学習も行ってきました。わからないところをユニバーサル数学でやり、かなり学力が向上し、手ごたえを感じました。

今回、また改めて貧困家庭が複雑な事情を抱えている現実を目のあたりにしました。家庭が必ずしも安心して学習できる場所ではなく、避難所的な場所を必要としていて、今回はその役割も少しは果たせた気がします。



子どもたちの居場所（中学生の保護者）

わが子は、学習に困難さがあり、中学1年生の時には某有名塾から「受け入れられない」と断られ、中学校からは「厳しさについていけないから部活にいれられない」と言われ…子どもの自己肯定感もなくなってしまいそうでした。心ある方々に支えていただきましたが、成績は伸びるわけもなく、2年生の時は理解のない先生の授業についていけず“うつ状態・二次障害”になりました。支援学校の高等部にはいけない・私立に出すお金はない・推薦もしてもらえない…子どもをどうやって高校に出し、社会に出せるでしょうか…。

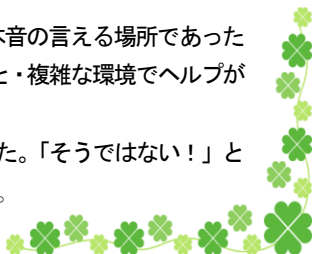
本人は「みんなといっしょに頑張りたい」との思いで、必死で頑張ろうとしているのに、どうしてよいかわからない状態になりました。その中でMESC塾に受け入れてもらいました。

数学は、基礎はできておりましたが、応用問題が取り組めずにいました。点数では50点から60点でした。ユニバーサル数学はおもしろいようで、塾のある日はほとんど数学が中心になりました。先日の実力テストでは校内で上位になり、学校の先生方も驚かれています。

高校入試や各検定試験の資格取得を目指す同じ年代の前向きな子どもたちがいたことは、かなり良い刺激になり、励みにつながったと感じています。

また、先生方の優しさや励ましに「子どもたちの居場所」となり、本音の言える場所であったと思います。学習に困難さがある子どもたちや、家庭が貧困であること・複雑な環境でヘルプが出せない保護者にとって大事な場所となりました。

塾生が「不幸を一度つかんだら、ずっと不幸なんだ！」と言いました。「そうではない！」と言えるように、私たち大人の助け合う姿をみせていけたらと思います。



4. 自然体験・交流イベント

自然との触れ合いや大人との交流を通して、気分転換を図り、仲間（支え合い）意識を自覚するなかで、学習へのモチベーションを高めることを目的にしました。

第1回「なぜ、勉強しなければならないのか」

「不登校でもできた社会的な自立とは？」

講師 塩生 好紀氏（New サポート代表・不登校プロジェクト主宰）

勉強するにあって根本の疑問を解決するために実施。学習することに困難さや疑問を感じている中高生、その保護者、支援者等を対象。講師の実体験に基づいて、不登校から立ち直って、目標をもって学校に、勉強に励んできた経緯を話してもらった。

勉強をするということの考え方を保護者や支援者の大人が学生時代等を振り返って話してもらい、また学生たちには、今の勉強への取り組み姿勢、考え方を自由に話してもらった。参加者どうして懇親を深めながら、ざっくばらんに、“勉強すること”その意味や意義について話し合うことができた。



第2回「夢を叶える生き方とは」

「高校生でもできた夢を叶える生き方」

ゲストスピーカー 中村 暖氏

「自己紹介、16歳世界一周について、高校時代の活動について、大学に入って、これからの新しい働き方と社会」など、スライドや実際に作成したものを見せながらの講演。20歳になる講演者の前向きな生き方、めげない精神に会場の参加者が多くに賛同し、さまざまな質問がでた。

ひとりの若者の実践を知ることで、それが特別なように思えるかもしれないが、やろうと思えば誰でもやれるということをしに学ぶことができたのは大きかったと思う。その後のFBでのやり取りが講演者と参加した学生の間で続いているという。

後半のワークショップは、子どもも大人も交じって、“夢を叶える”というテーマにそれぞれが真剣に話し合いをすることができた。



第3回「ぼくらの道をつくろうZ」

中学生、高校生と大人の方と、いろんな人が集まって、1日学校で想像して創造することを一緒に感じてみる。普段、学校でできない遊びを体験してみる。学習することに困難さや疑問を感じている中高生、その保護者、支援者等を対象。

午前の部

A 写真のワークショップ

「カメラが、新たな出会いを！」講師：小林順一（写真家・宮崎もやいの会代表）

B 描く創るワークショップ

「脳が喜ぶ！心が笑う！臨床美術」講師：瀬尾哲代（陶芸工房華漣主宰・臨床美術士）

C 書のワークショップ

「素のまま、ぐるぐる、もじもじ、筆持って」講師：生駒新一郎（書家・あわいや代表）

D 体を動かすワークショップ

「プロスポーツ選手のトレーニング体験会」講師：塩生 好紀（スポーツトレーナー・New サポート代表）

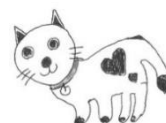


午後の部

全体ワークショップ「ぼくらの道をつくらーZ」

大きなベニヤの板に、グループで自然の物を使って、今の気持ちを描きます。ビートルズあたりの音楽を聞きながら。

廃校を使って、普通の学校ではできないことをのびのびとした自然のなかで体験してもらおうという趣旨で実施。講師の先生たちの工夫もあり、内容は素晴らしいものであった。ただ、学生の参加が少なく、当初の目的を達成することはできなかった。参加した大人は大満足であった。



5. 井戸端会議

事業報告会を兼ねて「子ども・若者の貧困を考えるシンポジウム in 宮崎」を開催しました。
シンポジウムを「井戸端会議」として、当事者も支援する側も一緒になって、自由に発言してもらうようにしました。



1. **なぜ、会議室ではなく、去川こども村なの？**
自然に包まれたこの空間で、心も身体もリラックスできるから。
2. **なぜ、シンポジウムではなく、井戸端会議なの？**
脱線、雑談、笑いの中から生まれる“本音”を大事にしたかったから。
3. **なぜ、食事付なの？**
食は、自然に、人を笑顔で繋ぎます。去川地どれの手料理を分け合って食べる楽しさを共有したかったから。
4. **なぜ、講師とパネリストが女性ばかりなの？**
理屈や制度ではなく、女性のあたたかい目線でもらえてみたかったから。
5. **なぜ、インフォーマル（民間主体）なの？**
形式ばらないで、自由な気持ちで、意見を出し合うことが大切だと思ったから。



プログラム

- 講演：『学校や地域から見えてくる子どもの貧困』 講師：盛満 弥生 先生
- WAM助成事業報告：事務局 川崎 郁夫



- 井戸端会議（シンポジウム）

第一部 『こんなことやってるよ』

第二部 『こんな風にやりたいね』

パネリスト

店子 日吉 香奈 さん、宇宙塵 ぴよこん さん、鈴木 なおこ さん

コーディネーター

大家 亀澤 克憲



●アンケートから

今日、この会に参加することによって繋がりが、ネットワークが飛躍的に広がったと思います。私も自分にできることをやっています

子どもがご飯とみそ汁が作ることができて、パンツと靴下の洗濯ができれば、少し変わらないかなあ〜と思っています。

親支援について、もっと深く話し合えたら良かった。

食に関して役立つことがあれば、声をかけて下さい。

子どもたちのためにがんばっている「大人」の方がたくさんいることを実感でき、大きな学びにつながりました。私も子どもたちを支えられる「大人」になりたいです。

うちの子も登校拒否で中1まで行かなかったのですが、あるきっかけで中2から行けるようになり、今ではすごく変わりました。友達との関係作りにもすごく努力したそうです。

居場所づくり、早速始めます。

様々な立場の方々の井戸端会議で、ここで繋がる方向にたどれば救われるのでは…。

貧困が生む厳しい現実にしられている方々の現実を知ることが出来た。

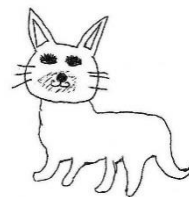
手をさしのべる前に、助けを求められる環境作りが必要。

救いへの手立てを知る事が出来、自分の出来ることを考えられればと思った。

答えが出ない、きれいに解決しない、あせらず、繋がって進んでいこうという前向きな心持ちで帰宅できそうです。

福岡で学生をしております。“おにぎり食べたい”の事件以降、急速に福祉対策が進む中、地域によって進み具合、進めやすさに大きく差があるのだと感じた。行政の力をもっと考えていきたい。

必要なのは、食と情報、確かにそうです！親にもっと情報が届くこと、そのためにアンテナを張っていただける環境ができる様、心から願っています。



電子黒板やタブレット端末などの情報通信技術（ICT）を取り入れた教育が広がる中、困窮世帯の格差をなくそうと、教員OBらでつくる宮崎市のNPO法人が、ICT教育の無料塾を始めた。生徒は中学生から20代までの約10人。パソコンやタブレット端末を貸し出し、使い方を教え、インターネットも活用して学習支援する。講師らは「ICT教育は経済格差が出やすい。子供の将来の選択肢が狭まらないうち支援を続けたい」と話す。

【黒澤敬太郎】

「ここをクリックしてみて。編集ページが開きます」。平日の夕方、宮崎市の福祉施設の一室で、パソコンを前にマンツーマンの授業が開かれた。宮崎公立大3年、日野葵さん（20）がワード文書の作成方法を教えた。塾を開くのは宮崎市のNPO法人「みやざき教育支援協議会」。中高の技術科の教員免許を持ち、定年退職したOBらが中心となった。2011年に設立された。学校のICT設備の有効活用のため、高校で授業のサポート

メディアと学びの困窮世帯にICT

教育格差解消へ無料塾

宮崎のNPOが 機器操作習得へ支援

や機器のトラブル対処にあたる他、山間地のICT教育に取り組んできた。困窮世帯の子供へのT技術者、大学生らも

し、独立行政法人・福祉医療機構の助成を受けて今年9月に活動を始めた。元教員や、IT技術者、大学生らも市内の福祉施設の教室に通う。一回あたり90分、3時間週1回開く授業。パソコンと意欲さえあれば、学習塾に通

支援は、昨年8月に政府が「子供の貧困対策大綱」を閣議決定したことなどから亀沢克憲代表理事（66）らが発案。議事が開催された宮崎

子供の貧困 厚生労働省の2012年の調査によると、所得が平均の半分を下回る世帯で暮らす18歳未満の割合を示す「子供の貧困率」は、16.3%で過去最悪だった。厚労省や文部科学省によると、生活保護家庭の高校進学率（13年）は90.8%で、全体の進学率を7.8割下回っている。貧困に苦しむ子供たちが学力を伸ばす機会を奪われ、就職などで不利を受ける「貧困の連鎖」が社会問題となっている。

新 教育の森

九州・山口



パソコンを使い、生徒にマンツーマンで教える「みやざき教育支援協議会」の講師

きた。当初、定員を30人も学習意欲を継続させられず、やめる生徒もいた。亀沢代表理事は「保護者や生徒に丁寧な目的を説明し、教室が居場所になるような雰囲気作りをする努力が必要になる。細々とした活動だが、地道に広げていきたい」と話す。

6. 学習支援をふりかえって（インタビュー）

代表理事 亀澤克憲

●生徒が集まらない

——事業をふりかえってみて、どんな課題を感じられましたか？

当初、チラシをあちこちに配れば、結構、生徒は集まるだろうと考えていました。そこで、募集チラシを2000枚印刷し、教育委員会、福祉行政、学校、社会福祉協議会、児童相談所、児童養護施設、民生委員などに配布し、新聞広告も3回出しました。しかし、2か月経っても、応募者は数えるほどしかありませんでした。

——生徒が集まりにくかった理由は、どんなことだったのでしょうか？

チラシの内容に「ひとり親家庭、経済的に厳しい家庭」などとうたったことで、対象者のレッテル貼につながったことや、eラーニングが未体験、教室が遠い、配布の方法が単なる依頼に終わったことなど、もっと検討すべきことがあったと反省させられました。

また、いったいどこに当事者がいるのか、学習支援の情報が届いているのか、本人たちに困り感があるのか、名のり出ることには抵抗があるのかなど、わからないことばかりでまったくの手探り状態でした。

——そういった生徒募集の活動を通して、どんなことがわかってきましたか？

関連するシンポジウムや専門家の人たちの話を聞くなかで、親の就労や疾病、育児、介護、借金等の問題を抱え、教育は後回しになっていることなどがわかってきました。

さらに、学校に関しては、ことばが過ぎますが、体面重視、上意下達、個人情報保護、教職員の多忙化などで、なかなか協力関係が築けませんでした。

ケースワーカーやスクールソーシャルワーカー、民生委員などアウトリーチ活動（戸別訪問）を専門とする人たちも、人材不足や多忙化で学習支援まで話が及ばないことなど、一緒に活動できなかったことも生徒が集まらない要因としてあったような気がします。学習支援といっても簡単にはいかないことがはっきりしてきました。

●学習意欲がない

——「生徒が集まらない」こと以外に、何か課題はありましたか？

次に課題となったのが学習意欲の問題です。応募してきた生徒のなかには、夢や目標がなく、あきらめ、勉強嫌い、無気力といったことで、学習が長続きしないケースも見受けられました。

——学習意欲のない背景には、どんなことが考えられるのでしょうか？

貧困の状況で、親子の会話どころではなく、自分の存在をまるごと認めてくれる大人が周囲にいないことや、誰からも愛されていないという意識から、自己肯定感や自尊感情の欠如、疎外感などを抱く子どもたちが多くいるという話も聞きました。

周りからは「ダメな奴、無理、止めとけ！」といった声で、「努力するだけ無駄、将来のことより今を楽しみたい」といった思いを抱くようになってきているということです。

また、学校現場の「競争と規律、自己責任論、同調圧力」などの価値観や雰囲気、挫折する生徒も多く見受けられます。教育が地域のためでなく、個人のためになっている。そこに競争を激化させる要因もあるのだと考えています。

学習意欲のない状態では、授業料の無償化、奨学金給付、無料学習塾などがいくら充実したとしても、それらが活かされない結果になります。いかに学習意欲を喚起させるかは、社会階層による意欲格差（インセンティブ、ディバイト）の問題とも関連しますが、子どもの貧困を考える時、重要な観点となると気づかされました。

●連携がとれない

——他には、どんな課題がありましたか？

当事者に支援が届くためには、どうしても各組織や団体との連携が欠かせません。しかし、現実には支援がバラバラ（点）に行われており、線や面につながっていないことを強く感じました。「支援」ということばでは、対応しきれなくなっているという現実です。

いろんな場でそのことは指摘されるのですが、なかなかまとめ役がおらず、いろんな相談窓口があった方がよいといった意識で、真の意味でのワンストップ相談が築けていないように感じました。当事者の方はあちこちで同じことを聞かれ、支援不信に陥っているケースも見受けられます。私も各方面を回りましたが、関連する組織や団体の情報共有がきわめて乏しいと感じました。

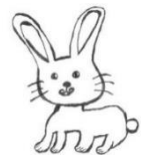
——各組織や団体が連携をとっていくには、どうしたら良いとお考えですか？

よく言われる縦割り行政や支援団体の縄張り意識、手柄意識、予算取り合戦で、制度が優先され、支援対策が現場ニーズとかけ離れている現実をもっと問題にされるべきでしょう。予算の効果や達成率などを検証し、ミスマッチの洗い出しが必要だと感じています。その上でやはり行政や社協が音頭を取り、民間も含め関係者が集まる機会を設けていただければと思います。

また、学校現場との交流が日常的にないため、学校が外部支援を頼んだり、業務委託を結んだりといった信頼関係が築けていないことも学習支援を阻んでいる原因だと考えられます。

さらに、地元企業やシニア世代などの地域資産の掘り起こしも、まだまだ、これからのような気がしました。

●まずは居場所づくり



——「生徒が集まらない」、「学習意欲がない」、「連携がとれない」と課題はたくさんありますが、今後にむけて、まずは、どんなことが大事だと考えられていますか？

実質、半年間という期間は短すぎて反省することばかりでした。

今後、どんなことができるのかということですが、まず学習支援する以前に「居場所づくり」が大事だと思いました。なにかをきっかけにその場所にきてもらう。そこから信頼関係を築き、安心して相談できる雰囲気をつくるのが先決のような気がします。

——「居場所」として、どんなところを考えられていますか？

例えば、地区公民館、空き店舗、公的機関の空き部屋、あるいは今回連携させていただいた(有)サン・グロウさんの「南駅前ふれあいサロン」などを居場所として考えられます。これらはさまざまな機関との協議が必要となりますが、子どもの貧困対策には欠かせない作業でしょう。

学校の空き教室も考えられますが、もともと学校嫌いの子どもが多く、また、学校にはさまざまな規制があり、自由に使える場所としては厳しいのではないかと考えています。

——「居場所づくり」に関して、「場所」以外に何か課題がありますか？

スタッフ確保も大事です。開設時間(夜間、休日)も柔軟に対応できる人員が必要となります。子どもたちは休日や夜間での居場所も求めているからです。行政主導では時間にしぼりがあり、難しいところです。民間ボランティアやNPO法人、学生、シニア世代などで対応せざるを得ないでしょう。

財源確保も課題です。民間団体にとっては事務所経費に苦慮します。助成金の1割でも事務所経費に回せればとありがたいところです。助成金、寄付、キワニスクラブの子どもの貧困対策基金などでの財源も考えられますが、何らかの収益事業がないと継続は厳しいでしょう。

さらにフードバンク事業との連携も欠かせません。子ども食堂や親子食堂も含めて、パン屋、スーパーなどフード事業者との連携、食料品寄贈などの仕組みが必要となってきます。

その居場所での当事者との関わりについてですが、支援の押し付けになつては、子どもたちは寄り付きません。あくまで小さなケアや偶然の出会いでのケア、様々な声掛けなど、長屋スタイル、廊下カフェなどといった疑似家族的な関係が大事になるような気がしています。

●生徒をどう集める

——安心して過ごすことの出来る「居場所」が確保出来たら？

その居場所にどうやって子どもたちを集めるかが次に課題となります。当事者がもっとも必要としているのは、「食と情報」だといわれます。それをどう届けて、つながりを築くかですが、例えば、公営住宅へ案内チラシを配布し、継続的にその情報が欲しければ申し出てもらい、希望者には定期的に情報を届けるなどを行っている支援団体もあり、参考になります。

また、若者など情報媒体としてはSNS (Line、YouTube、Blog、2チャンネル、Facebook など)の利用者が多く、検索サイトなどで情報を見つけやすい手段も検討すべきでしょう。

——生徒に集まってもらうのに、他に必要なことってありますか？

何より必要なのは、やはり学校（中学校や特に定時制・通信制高等学校など）との信頼構築です。高校生や中途退学者などの情報は、現場がやはり持っているからです。ただ、情報を提供してもらうためには、管理職やカウンセラー、進路指導部主任、旧同僚との信頼関係をいかに結ぶるかにかかっています。定期的に学校に出向くなどして、信頼関係を結び、情報共有する必要がありますね。

●学習意欲を喚起させるために

——「生徒が集まらない」という課題がある程度解決しても、「学習意欲がない」という課題もありますよね？

居場所に来た子どもたちにどうやって学習への関心や意欲を持たせるかですが、その前にやることがあると考えています。

とにかく当事者には自己肯定感がが必要です。誰かの役に立っている、地域のために何かやれることがある、期待されているという意識を持たせることが先決だと思います。

そのために、例えば、地域ボランティア活動（大淀川河川敷、生目運動公園などの清掃）を一緒にに行い、その頑張りを周囲の大人たちに認めてもらう、あるいは、新聞記者に取材してもらい、記事にでもなれば、自信にも誇りにもつながるでしょう。誰かに必要（愛される）とされているという意識から、勉学への意欲は高まるといえるからです。

——誰かに必要とされている、何かやれているといった意識を持てることが、学習意欲につながっていくのですね。最後に、今後についても教えて下さい。

意欲が芽生えれば、次に例えば、休日に学校図書館を借りて、就活カフェや企業説明会、あるいは各種コンテスト、トークセッションなどを通して大人と交わり、将来の職業像を描くことができます。それらの企画運営はNPOなど民間団体が担うこともできます。

また、大学教授や有名人の協力によるインターネットを使つてのネット相談や学習支援も考えられます。子どもの貧困対策に一役買って出たいという人はたくさんいます。生徒には必要なパソコンや無線ルーターなどを無償で貸与します。それはわたしたちMESCの強味です。

あるいは、「南駅前ふれあいサロン」でのブックカフェ、哲学カフェ、詩の朗読会などもやってみたい試みです。その他にも、自然体験やワークショップ、講演会、シンポジウム、調理実習など、「遊び」のなかに勉学の芽を育むことは容易です。

支援者と当事者という関係から、さまざまな人たちが関わる地域づくりに、一緒になって学び、働くことへ向かうことが大事だと考えています。社会階層が固定化するなかで、自立が孤立につながっては意味がありません。「地域づくりとネットワークのなかでの学習支援」という観点が必要になってくると思っています。

7. 運営委員のコメント

食・アート・運動で子どもたちに微笑みを

(生駒 新一郎)

こどもの貧困について深く知る機会となった。社会の構造的課題が与える子どもの生きにくさ。子どもに眼を向けると、親、地域、学校というコミュニティのことから、教育、就労と様々に見えてくる。子どもが「助けて」と言う前に、大人が「助けて」と言える寛容さのある雰囲気が、まず必要。

食、アート、運動等を介して交わる中で、子どもの素が微笑む瞬間が生まれる。自然な交わりの中で。心の安定が作られて行く過程で自学への目覚めもあるものと、事業を通して思った。

寄り添うだけでは (永山 倫太郎)


ここぞとばかり、様々なことが復興に便乗して焦点はぶれる。各セクションとも貧困とは対極にある消費の過剰に針を振り切っている。寄り添わなければ見えてこない課題と、ただ寄り添うことだけが解決の糸口であることを見失った迷い迷いの指示が飛び交うばかり。そのことを今事業では思い知らされた。

教育分野の市場開放は改革の好機に思われるものの、今回の助成事業で得た貧困包括への居場所再構築の意義はつまるところ、「自発性こそ」の啓蒙に力点を置くこととしたい。

総合的な支援の必要性 (城戸 松豪)

経済的困窮世帯の子どもの学習面からの支援をしてきました。経済的困窮からの脱出手段の一つなのですが、生活習慣や学習意欲のこともあり、一つの支援、一つの組織で解決するのではなく、総合的な支援が必要になります。また、支援を受けやすい環境を作るため、当事者以外の理解も課題です。


経済的困窮は子どもと大人、双方への支えが必要です。支援活動、組織間、社会との総合的な支援が途切れないよう、そして何より当事者の心を支えていくことが重要だと感じています。



学習の習慣化から好成绩（濱門 康三郎）

この事業の取りかかりの頃は、ここまで貧困家庭問題が顕在化するとは予想してはなかった。しかし事業が進むにつれ、個人の学習意欲・習慣の問題だけでなく、それ以前の学校教育、家庭と学校と地域との連携、生きる力、生きる意欲への喚起等の問題が様々顕在化してきた。


事業が進むにつれ根底に潜む解決しなければならない課題が何となく認識できた。また最終的に学習支援につなげる支援の方法も見えてきたような気がする。高校入試を迎えた中学 3 年生が、学習習慣が付き、自ら通ってくる姿勢が生まれ、最後の定期試験で思いもよらない好成绩を取ってくれたことはこの事業の成果だと思える。この事業に参加できて感謝しているし、次につなげる事業を検討していきたいと思う。



リーチの方法の検討を（黒岩 雄二）

中学生の不登校率は全国的に見ても小学校よりも格段に多く、宮崎県においてもおよそ 40 人に 1 人が不登校という現状がある。不登校の理由は様々であるが、保護者に余裕がないことからメンタル的なサポートを十分に受けられないことも要因の一つになっているようである。

今回、そのような子ども達にも参加して欲しかったが、保護者の理解を得ることが難しかったと感じている。この事業を通して、学習支援におけるターゲティングとその対象に的確にリーチさせる方法の検討が重要であると感じた。



MESC とは

MESC（メスカ）は NPO 法人みやざき教育支援協議会 Miyazaki Education Support Conference の略称です。

2011 年 3 月に地域・学校での教育の情報化を総合的に支援し、情報教育の安全かつ速やかな普及発展を目的に設立されました。

児童生徒の ICT 学習能力の育成と教職員の ICT 活用力の向上、校務情報化などを支援する団体です。ICT を生活のなかに活かしながら、人や教育、地域をつないでいくことを目指しています。

会員は ICT 業務に関心を持つ教職員（現・退職者）を中心に、大学や地元 IT 企業、ボランティア団体などから募り、産学官によるコラボレーションで地域活性化、社会貢献に取り組んでいます。

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

【発行日】 2016 年 3 月 30 日

【発行者】 特定非営利活動法人 みやざき教育支援協議会
代表理事 亀澤克憲

【住 所】 〒880-0032
宮崎市霧島 4 丁目 1-2 セントパーク 206

【tel/fax】 0985-41-4451

【URL】 <http://www.npomesc.jp/>